

御大典奉祝歌

四左 根 木 操

(一)祝へ喜べわが大みのり
 町のすみん野の果て遠く
 きらめく日の丸大提灯
 菊の香高く日ざしはのどか
 我日の本はばんくさい。
 (二)祝へ喜べわが大みのり
 町のすみん野の果て遠く
 まなべ學生あけよ國華を
 活氣あふれて日ざしはのどか
 我日の本はばんくさい。
 (三)祝へ喜べわが大みのり
 町のすみん野の果て遠く
 いや榮え行く竹の御園生
 あまつ日さへも笑ませ給へる
 わが日の本はばんくさい。

提灯行列

四右 横 井 ふじこ

テトテトテト
 ラツバの音が澄み通る
 ストストスト
 私のおさけの髪が
 上つたりおどつたりして
 黄色く塔は浮び出て
 松影が黒く續いてる。
 と一つ。真赤い提燈がおどり出た
 と見るく飛びだす
 螺旋の様に。まわつてふるへて
 赤い玉
 クルクルクル。
 火の瀧。
 飛び。
 舞ひ
 浮き上る。
 提燈が渦巻く時

ドーン
 バツと花火が天につき上り
 萬歳の聲が地にみち渡る
 輝く。天が
 祝へくさい祝へ。

朝の旅

三左 福 井 妙 子

電車は進む闇の中を
 愉快けに音をたて、
 地をおほふ闇をつきわけ
 冷き霧をはらひて
 あ、勇ましき其の音は闇をつんざく。
 電車は走る朝もやをぬうて
 心地よき風はそよぎ
 山はむらさきにそみ
 たなびける雲はばら色に笑む
 あ、さわやかなる朝の旅よ。

提燈行列

三右 上 村 康 子

電車は進む橋の上を
 ごうくと轟きつ、
 白み行く東雲の空の
 かきやき出づる朝日の光りに
 さらくと小波のむれは光りぬ。
 電車は入りぬ朝のまちに
 また、けるともしびは白み
 息づくがごとくどよめきは湧く
 勇ましきわたちの音と共に
 我れ等は入りぬ朝のまちに。
 火の海か……。
 光の海か……。
 街にあふる、
 提燈の
 あかくもゆる灯の
 美しさ。

その紅は
若き國民の
御のりを祝ふ
真心の象徴。
活々と規則正しく
はてしなく長く
力あふる、足どりで、
紅提灯は絶間なくゆる、
燃ゆる紅の美しさ
赤き心の燃ゆる如し。
あゝ！
淨き眞の麗はしさよ。

天皇陛下萬歳

二右 前川 ふく

……ジジジジ……
……沈黙……
チリ／＼／＼／＼／＼
一秒、二秒、三秒……

ドドン、ドドン、
ボウー ボウー
ピー ゴーン、ゴーン
三時!!
天皇陛下ばんざあい——
ばんざあい——
ばんざあい——

御大典

二左 櫻井波子

みんなで祝はう 祝ひませう
我が大君の 大みのり
みんなで祝はう 祝ひませう
御代の御さかえ 祝ひませう
鳥がカア／＼ 楽しさう
雀がチュン／＼ 嬉しさう
お山の上の 一軒家
ひーひらり
あつちの家から パンパンザイ
こつちの家から パンパンザイ

喜びの日

二右 鶴飼 ふみ

コケツココケツコ夜が明けた
今日はうれしい御大典
お日様ニツコリ顔出した
お鳩もポツポツ鳴出した。
今日はうれしい御大典
空にはお日様キラキラ
町には國旗がヒーラヒラ
道行く人はニッコニコ。

大祭

二右 甲村年子

今日はたのしい
大祭。
雀も鳥もおどりましたよ。
お家ぢやねずみも

御一緒に。
テケテン、テケテン
おどりましたよ。
今日はたのしい
大祭。
エスヤもタマヤも仲よく。
大きなお口で
聲張り上げて。
パンザイパンザイ
歌ひましたよ。

奉祝

二右 岡本敏子

お山の上の赤い文字
誰が書いたか
「奉祝」と
いつも通るお陽さまが
そつと書いて通つたと
梢の百舌鳥は言つてゐた。

奉祝の町

二右 森岡章

祝へや祝へやわつしよいく
小さな御輿をかついで走る
そこどけくどかぬと危ない。
祝へや祝へや、おどれやおどれ
三味線ひいて、太鼓をたき
男も女もねり歩く。

祝へやくんとんやれく
おどれやくわつしよいく。

奉祝の夜

二左 平瀬信子

一、今宵地に満ち溢るゝは
よろこびの聲
ひびけよひびけ
よろこびの歌聲。

二、今宵空に映えかゞよふは

ことほぎの灯の色

咲けよく

愛國の灯の花。

御代のお祝ひ

二右 菊田花子

人はつとふ
夜晝の見さかひなく
百雷の如きとよめき
狂亂の如き歡呼
いざ祝へ言祝け
昭和の御代の御大典。

祝奉の宵

薄暮は迫る
喜の息の様に
白く。
其の中に燦として
灯がともる

奉祝と
ほのやかに
にほふ
町々。

菊

盛

二左 米田初子

白菊黄菊匂ひます
雲井の奥に匂ひます
賤が庭にも匂ひます
御代萬歳と匂ひます

二左 松村利恵

菊は今を盛りと咲いてます。
私の好きな大典色の菊。
皇后陛下のお召しになつた、
御服のやうな白の菊。
私は菊を取つて来て、
幾何模様を描いて、

よく出来れば着物の模様にと、

思ひました。

黒地に白や大典色の菊を大きく、

ゑがきました。

菊真盛りのこの佳き日に

私の着物は出来ました。

二左 岩井雅子

お庭の小菊は皆開いた。

小菊のくす玉皆開いた。

さあさ皆来て歌へや遊べ。

花の御馳走進じよく。

小菊の世界へ皆来て遊べ。

あれく轉んだ坊やが轉んだ。

お庭のくす玉皆パツト笑うた。

二左 喜多村綾子

お庭にほつちり菊咲いた。
丸いお顔に緑のおべ。

可愛いおめ、をくるくまわし、
緑の舞臺でくるくま舞つてゐる。

おどつて／＼おどりぬいて、
一寸坐つて茶話會開きましょ。
もし／＼豆さんおどつておくれ。
舞つたら私がおべ、買つてあけよ。

二左 松岡露子

白黄赤の菊の花。
畑一ぱいに咲いてゐる。
丸く／＼まりの如。
細く／＼針の如。

二右 吉止睦子

透き通る朝の光は
すめらぎの廣き恵
きら／＼と輝やく霧の粉は
喜びに集ふ國民です。
其の中に浮き出て

清らかに笑む白菊は
奉祝に勇む心
喜びに満ちた明けがたです。

二右 石田ヤエ

お日様照つた
菊照つた
黄色く照つた
菊照つた
青い緑の
葉の中で
お日様照つた
菊照つた。

二右 山路サヨ

どこまでも／＼
蒼く、／＼びえた室
大海原の様に洋々と
輝やく空に

太陽は今し園生に目覚め
鳳凰の羽の様に
菊の花は咲きほこる。

二右 松田千代子

松の根本の山菊
ばつちり咲いた
今日のよき日に
見開いたひとみ。

二右 三好歌子

小菊の香たゞよふ
たのしい教室の壁に
崖を落ちる瀧つ瀬の様な
小菊の影が流れる。
君ヶ八千代を
ことほぐ
小菊の影が流れる。

提灯行列

二左 倉中英代

バンザイバンザイ
奉祝バンザイ
お祭だ
日本中のお祭だ。
バンザイバンザイ
お祝だ
國を舉げてのお祝だ
天皇陛下の御即位だ。
亦い提灯日の丸提灯
ゆら／＼ゆれて
進む進む
家の窓から町を見れば
火籠のやうだ
火の海のやうだ。

ばんばんざい

一左 淺田 すす

日の丸の旗が

高いな

風に吹かれて

ゆらくすれば

高い朝日が

バンバンザイ

杉のアーチが

高いな

みんなそろつて

アーチをくどりや

高いお空が

バンバンザイ。

一左 今西 さく

うれしい

なみだが出てきます

お空は眞さを日本晴
赤、白、みどり

こむらさき

うこんのんだんたら

うつくしい

街もうれしい、おめかしだ。

辻々に賣る

菊の花

黄いにましろに

うれてゆく

フェルト草履も

ゴムぐつも

きりのかつこも

キットのくつも

みんなうれしい音がする

人にまじつて私も

両手大きく

ふつて行く

何が何だか

ほゝゑまれます

うれしいなみだが

出てきます。

一左 柳 子

青い空

白雲

ゆうたりゆたり

秋晴の日。

萬歳の叫

校庭をゆすり

青空をつくよ

御即位の日。

一左 市村 秀子

からくくとカーテンあけば

ピアノにさつと陽光がさしたよ

さあ〜これから歌ひませうよ

ボン〜とピアノを弾けば

私のからだかひきしまつたよ

「一、二、三」はら

「三種の神器」

ちよつと妹の顔のぞいたら

コバルトの空までも

京都の御所までも

とうたつてたよ。

一左 廣瀬 貞子

町は國旗のトンネルだ

トンネルだ

どこの家にも

グロリー島が飛ぶ。

たしかに

グロリー國だ。

一左 杉村 菊枝

黄い公孫樹のおちる頃

青い高い空の下

ちようちんかざして

奉祝おどり子

黒いハツビに白い袴
長いバツチに黒い足袋
頭のチヨンマゲ風に亂る
町から町への間道
公孫樹が散つた一つ二つ。

一右 馬場 武子

一、すんだ空にはどよめき聲ひびく
耳をすませばお宮の森に
どの子もこのこもみなおどる
女も男も赤い襦袢ひつかけて
足をそろへてみなおどる。
二、すんだ空にはどよめき聲ひびく
耳をすませばお宮の森に
お家はみんな戸がしまり。
おるすの犬もねむたそう
ひなたの猫もゆきたそう。
三、星の空にはどよめき聲ひびく
耳をすませば野道のあたり
ちらほら屋台の火が見える

どん／＼太鼓もちかくだらう
今夜は一晚おどり明し。

一右 山口 春子

一、紫宸殿は高御座
金の大鳳翼を張りて
我大君の御位に
即かせたまふぞ
萬々歳
二、紫宸殿は高御座
赤地の錦豊かに敷かり
我が大君の御位に
即かせたまふぞ
萬々歳
三、紫宸殿は高御座
ラデンの御柱眩く光り
我が大君の御位に
即かせたまふぞ
萬々歳。

短歌

聖影讚仰

さまざまの色もてなれる菊の園みのり壽ぎ今盛なり
大輪の白菊の花開きたり今日のよき日を祝ひまつりて
肌寒き風に木の葉はゆれてけり鹵簿待ちまつる街路樹のもと
むれて咲く小菊の前に友を待ち高き香をしみじみとかぐ
たはむれにむしりてさつと空になけし菊はくるくる陽に輝くも
よき日なり朝日をあびてはたはたと大空に舞ふ日のみ旗かな
地を裂きて湧き出づるが如く萬歳の叫びは風に送られて來ぬ
とりどりに色うつしく咲きにけるにほひも高き菊の花かな
高御座のほらせ給ふすめらぎの美しき御姿偲びまるらす
豊かなる秋の日浴びて家々にか、けられたる日の丸の旗
榮え行く御代壽ぎてとりどりに咲き匂ふなり黄菊白菊
大空へ海の彼方へ野の果へ大典の歌のひびく今日の日

五左

北浦美砂子
大友 俊
武藤 玲子
榎尾 道子

木村 貞子
明 珍 和

荒井まき子

ほのかなる菊の匂の漂ひぬつゆまだしけき山晶の朝
 ほがらなる御大典日の軒並に紅き御旗の空におどるも
 めでた世をことほぎあへる若人群の紅き假裝姿のにぎはしきかな
 天地にみちてとよむは大御代のはじめことほぐ國民の聲
 千早振る神代のみ國のみひつぎに今日つきませり我が大君は
 ことほぎのしるしまつると異國人大わだつみをこえて來にけり
 天垂らすおほざらの下にちぎれよと腕のかぎりに旗うち振りぬ
 丸太木にあかしろの布まきつけてこの里人もアイチつくりぬ
 大君の御代にわれ生きてアイチなる大國旗の下をくぐるも
 ひむがしの海にかよふ新帝君が御稜は廣し尊とし
 日の本の君と民との隔てなき真心をもて榮えいまさむ
 民は皆萬歳祝ふ鳥も又萬歳うたふ此の豊秋を
 心なき我も此の日を尊びぬ神をまつらす大にへ祭
 賤が家の軒端に咲ける諸菊の青きみ空に映ゆる今日かな
 かしくも今日しのほらす高御座千代萬代と仰ぎまつらむ
 そのかみの天の岩屋戸あけし世を今まのあたり偲ぶかしこさ
 秋風に吹かれてゆらく岩根菊清き姿を水にうつせり
 すみ渡る秋のみ空に咲きにほふ黄菊白菊さかりひさしき

乾 ヨ シ 子

大 西 陸

藤 井 佐 和 子

尾 形 千 萬

杉 山 な を

増 井 敏 子
 井 上 は る
 森 澤 ひ さ

佳 節 奉 讚

たかみくらのほらせ給ふ大君に歌たてまつる今日のかしこさ
 晴れ渡る秋の日和に日の丸の旗をか、けて祝ふめでたさ
 ひなの子の菊をかざして今日の日を祝ふ如くに嬉々と、びゆく
 鳳輦のわだちもかろくしづしづと進ませ給へり大和路さして

五 右

佐 藤 静 子

太 田 富 貴 子

山 崎 愛 子

井 上 美 代

森 田 え ん

上 田 静 江

名 和 正 枝
 村 上 晴 江

うれしさはめでたき今日に生れ居て我が大君の御顔拜すも
 畝傍山常盤の松も今日こそは心ありてや緑深かり
 大君の即かせ給ふを壽ぎて白菊黄菊今盛なり
 皇太子登り給はす高御座秋空のごと彌高くあり
 かしくも御幸給へる大和路にひとしく待てり君が代の民
 初冬の澄み渡りたる大空に錦のみ旗ひるがへりたり
 さわかな心いだきてをり立ちし足もと近く黄菊にほへり
 澄み渡る空も小川のせ、らぎも君のみいつをた、へまつらめ
 大君や菊の香高き今日の日に天津日嗣につき給ふらし
 にひしねを神に捧けて今宵しかもかみの宮居にねぎ給ふらし
 来て見れば夜たちこめて今日の日をむかへし人の田にみちみちぬ
 白砂のきしみも高き大君のお馬車は進む秋空の下

かつかつとひづめの音も和やかに青き空にひゞきぞ渡る
 日の本のみ國のさかえことほぎて匂ふもうれし庭の白菊
 しらぎくの咲きこほれたる裏庭に朝の光おだやかにさす
 いにしへのすめらみかどの御前にてあやにうたひて舞ひしとか聞く(五節舞)
 いにしへもかくやとばかりあざやかに唐衣ふりて舞はれしと聞く(五節舞)
 菊香る今日よき日に大御代のいや榮えませと神に祈りつ
 輝やける昭和の御代の大君の御稜威の如く朝日匂へり
 大御典あけます秋を一入にかゞやき匂ふ菊の花かな
 市民等の御代を壽ぎおどりさわぐ聲にぎやけき夜の街かな
 榮え行く御代に生れし喜びを高く祝はん諸聲あけて
 佳き秋にみよいやさかを壽けるきくの香の地にみどりけり
 悲慈深き若きすめらぎいたゞきてわが日の本の榮え行くなり
 野分吹く小路に遊ぶ子等達も祝へ祝へと山車のまねする
 門ごとに揺ぐ國旗に日射してあたり静けくよき日も暮れ行く
 朝まだき大君をがむ喜びを深く抱いて暗き道行く
 おほらかに大きわだちのめぐりつゝ君の御馬車の過ぎさせ給ふ
 今日來ます君を迎へて大空のいよよさやけく青み渡りぬ
 みだれ咲く大菊のそばに我立ちて仰けば白き雲の流るゝ

堀岡セツ
 水野静江
 小岩井清子
 島治子
 安村ミネ
 木本春枝
 廣岡キミエ
 無名氏

はづれなる賤が菓屋の下に咲く細紅菊今さかりなり
 百舌なける小田の畔道たどり來て賤がまがきの菊を見しかな
 さびれゆく曉時庭をさむざむと一群咲ける白菊の花
 曉時の小窓の下に白々と昨夜の雨にぬれて咲く菊
 祝盃におきなや笑まん千代八千代
 のほる日や風ぎて果なき稻の海
 夜廻りの拍子木さえて夜寒かな
 御光や草木に及ぶ豊の秋

耀 小 雲

四右 瀧村 筵子
 石井久榮
 佐藤静子
 廣岡キミエ
 堀内ユキ

神やまと あきつみかみとたゝします 我が大君の御たみ我なる
 若竹のたゞ大空をあふぐごと のびたちて行け わがあきつしま
 秋の日に我がすめらぎの萬歳を三度叫びてわれ涙せり
 大神に我がすめらぎのまみえますしもつきの夜ぞあたゝかくあれ
 ぬかるみのちまたの道もうれしくて赤きテープを求めあるけり
 五百枝千枝茂り茂れる老松に葉をくふたつも千代よはふなり
 静かなる御代の姿にならふらんみその、松は枝もならさず
 山里を訪へば垣に白菊の香めでたる咲き匂ひおり
 光輝あり天皇の大御代を菊盛りなる今ぞ迎ふる
 若松の常盤の色も太陽に透きて今日の御幸をまちまつるらし
 萬歳の墨も太らに大御旗高く輝けり今日の御典に

四年左組詠草

大君を糧に迎へ奉りて

ゆるやかに進ませ給ふ風輦のわだちのきしみ心にしみぬ
 三千年の古き歴史をものがたる畝傍の山の松の色こき
 大やしまはじめ給へる皇祖の陵の松は永久にかはらじ

四右中芳子

四左梅田房

四左大塚駒

西本マサ

静けさのまなかに馬をすゝめゆく近衛の兵の服のよろしさ
 すめらぎの御旗美し秋の日のまひるの風にひるがへりつゝ
 大君のかしこき行幸拜むとみ民並み坐す秋空のもと

御所拜観

木も草もうす紫に香りつゝ御所の朝はしづまりてあり
 白堀のした流れゆく水澄みてうれしき笑顔あまたうつれり
 高御座のほり給ひし大君を目にもうかべてうち仰ぎたり

菊

ゆるぎなき御代の榮えを誇ぎて御園の菊は今盛りなり
 彌榮にさかゆる御代の菊の香やとつ國人も愛で集ふまで
 秋晴れの空にむかひてよきほこるわが庭の菊の大き姿や
 空はれて秋風わたるこの庭に菊の盛りていとめでたけれ
 年々に色香は添へどこの秋はいよゝめでたし黄菊白菊
 この佳き日家内淨めて裏畑に咲きたる菊をた折り飾れり
 わが祖母の丹精こめし鉢植のましろき菊も今さかりなり
 祝ぎごとの重なる秋に咲き出で、香りめでたき白菊の花

辻井ハツ

榊房子

西橋正子

高阪照子

安井良

西本マサ

田中美代

戸水絢

川口房子

神戶千鶴枝

奉 祝 の こゝろ

逢ひがたき御代にあひたるうれしさを聲のかぎりにことほぎまつる
さしのほる朝日おろがみ新た代をことほぎまつるうれしきあした
わが君は日輪のごと月のごとよろづの民をめぐみ給へり
日章旗かざして今日のめでたさを聲をかぎりにはふ國民
朝風に旗ひらくとひるがへり喜びみつる村の家々
おほみのりことほぐ如く稻の穂もこがねのふさを重けにたれぬ
遠さかる鈴の音きつ、號外を圍みて語る子の面かやけり
御前にて袖ふり返す舞姫に祝ふ真心我おとらめや
薪きる賤の翁も紋附を羽織りて祝ふ今日のよき日に
喜びを口には出さね落着かぬ父のそぶりを見ればうれしき
奉祝の文字新らしき提灯の真下に集ふ幼な國民
日の丸の提灯もちて勇み立ち二人仲よく出てゆく弟
さまくによそほひこらしねり歩く奉祝おどりおもしろきかな

四 年 右 組 詠 草

畝傍に御函簿を拜す

福 島 順
大 谷 千 代
橋 本 静 代
田 中 美 代
矢 追 不 二
長 澤 伊 起 子
本 條 艶 子
戸 水 絢 子
根 木 操
平 出 嘉 子
柳 澤 貞 子
矢 追 不 二

大和路に御函簿拜すよき日なり東雲の空みどりにあけて
朝露にすそぬれて行く老婆あり孫らしき人に手をひかれつ、
大君のみゆきの日かやさし上る朝日の影のあかくさやけき
ゆらくと陽炎もゆる田の家にながめゆかしく見ゆる日の御旗
田の面に御車まてる民草をのどかに照らす天つみひかり
國民はかけろふ燃ゆる田の中にすめらみことの行幸を待ちぬ
民草のひれふす中をおこそかに先驅の騎馬は進ませ給ふ
陽に光る大和の路を御函簿は繪卷の如も進ませ給ふ

御 所 を 拜 し て

大君の登りましつる高御座今日まのあたりおがむかしこさ
せ、らぎの流も清きみ園生にそびえてたかき御所の老松

民 草 の こゝろ

人々の顔はれやかに輝きて高らにひびく萬歳の聲
我部屋に御姿かけて祝ふなり千代八千代まで榮へませとぞ
八千代かけ御代ながかれといのらましめでたき今日の空仰ぎつ、
はるかなる御空仰ぎて大聲に日本人よと叫びける我

三 好 悦 子
增 田 静 子
小 野 若 菜
八 島 春 尾
飯 田 ふ み ち
大 上 み ち
岩 井 鈴 子
菊 田 と み
米 澤 坤 子
八 木 ふ み
關 木 き ぬ
竹 田 節 子

榮ある今日の御典に生れあふ我が身の幸は何にたとへん
集ひては我が君が代のことほぎを語りあひつゝ國をほこれり
まごゝろをこめて歌はん今日の日を我は日本の國民なれば
里とほき谷間につもる落葉にも日の御光は照たまふなり
落葉して輝く銀杏拾ひけり君のめぐみの深さ思ひて
黙々とたゞ涙せり奉祝の真心こめし部屋飾り終へて

菊

白菊の香も高き我が室にふりそゞぎくる日の光かな
菊の香の部屋ぬちに満ちて夢にさへ香ひくるこそうれしかりけり
今年はいさみて植えし裏の菊花も祝ひてよく咲きにけり
紅葉して秋風通ふ山の家垣根にひともと白菊のさく
うなる子は菊畑ある細道を手をひかれつゝふりがへりゆく

日の御旗

天皇の御稜威あまなく日の御旗風になびけり屋根の上高く
喜びにふるはぬはなしいづくにも國の御旗はひるがへり居り
朝まだき三笠の山をながむれば朝日に光る奉祝の旗

平井 静榮
上田 敏子
眞田 正子
今西 富子
出口 道枝

菊田 トミ
松本 君子
山田 はる子
奥西 静枝
大東 静枝

岡本 敦子
中室 房子
平井 静枝

秋空にひるがへりたる日の御旗めでたき御代のしるしなりけり
なつかしき菊の香匂ふ教室の隅にひらめく萬歳の旗
兩の手に萬歳旗を高く上げ真心こめて練り歩きたり
脊のびして漸くとゞく日の御旗に蜻蛉飛び來てわけなくとまれり

かしこき大御典を祝ぎ奉りて

國民のまごゝろをこめ祝ぎまつるこのもろ聲を君聞こし召せ
昭きかけき空日輪も和やかに笑みて祝ふか我が君ケ代を
千代かけて榮えますます大君の聖代に生まれし我がこのよろこび
かぎりなき瑞雲天にみちくゝて地にあふれたる民の歡聲
夜もすがらあかき灯町々に波うたせつゝ祝ふ人々
山かけの道ゆきし時ゆくりなく聞え來れり君ケ代の聲

畝傍に御親謁の時御召列車を拜して

みくるまの通り給へるみあとをばかたじけなさに又おがみたり

三笠山上に書かれし奉祝の旗文字を見て

もみぢせるわかくさ山にかゝれたる奉祝の文字日にかゞやけり

喜多美子
前本キョウウ
福森光江
今井南都子

三左 水野 幸子

御大典御儀の行はせられた
御後の御所を拜観して

大みのりみあと拜みて我しらす神々しあに頭垂れたり
白砂のたゞおごそかにしかれたる御園に入りてえりを正せり
うちならぶみはたかゞやきその折の神々しさのしのばれにけり
御まくの中に拜せる高御座君が御前に侍りたるごと
花のごと袖ひるがへし舞ふ姫のすがたしのびて通りかねたり(五節の舞姫をしのぶ)
悠紀主基の淨らかな田を思ひつゝ、じつとながむる美しき屏風
ふむ砂の音もきよらに柴垣を大菅宮内に入りたり
そのまゝの粗木をくみて造られしこの御宮の神々しさよ
悠紀主基の新稻とりて神々にさゝけたまへる君の尊とさ

菊 盛

よろこびのあふるゝ國の地に生ひて庭の黄菊の今盛りなり
かゞやける御代をことほぎ菊の花今をさかりとさきにほふかな
さきみてる菊の香も高くしてはえある秋の空の青さよ
かしこくも我が大君の御紋章の菊は薫れりこの佳き日かな

三左 水野 幸子

菊 盛

晴れ渡る秋の日影に輝きて今盛なり黄菊白菊
様々に色異なれど菊の花千代の香は變らざりけり
大君の大御典ある秋なれば菊もことさら色まして見ゆ
大君の御代壽ぎて咲く菊の千代の香は今盛なり
限りなきよろこびはこれ大みのり菊の香高きこの秋にして
青空に菊の香高き秋眞中わが大君の即位し給ふ
日の本の御代のさかえをことほぎて菊の咲き満つ秋の大地に
曙の空にはえつゝ、さ庭邊に黄菊の花は咲きみちたるも
大君のめでたきみのりことほぎて千種の菊も今盛りなり
我が庭に咲にし菊の日にはえて花も祝はん今日のよき日を
廣庭に黄菊白菊咲きみちてあかつき静かよきにほひする
高御座のほります目をまちにけん庭の白菊さき競ひつゝ
大空のはてなく澄みし小春日に庭の白菊盛なりけり
庭に咲く菊の香もいやましてむかへまつるか今日の喜び
この秋も白菊の花咲き出でぬ國の譽のほふが如く
大君の大典の秋のめでたさを庭の小菊も咲きさかりつゝ、

三右 北朴木道子

三右 出崎千恵子
三右 船後博子

三右 谷村つね子
三右 山本ヌイ
三右 中島さわ子
三右 石川壽美子
三右 田村節子
三右 杉原綾子
三右 清水濱子
三左 石井清子
三左 岩井濱子

かしこしや天津御日の御光は庭の小菊の一片にまで
 取りくの黄菊白菊いや香れ日の本の國のよろこびの今日
 大君の大御光は四方に照り日の本の國は菊盛りなり
 白菊や黄菊小菊と科はあれど御代をよそほふ花にありけり
 培ひし日頃のこゝろ今見えて白菊の花高く香りぬ
 白菊に黄菊交りて咲きて居り御即位の日の床のゆかしさ
 小春日の空たかくすむ菊園に子等の聲するひるさがりから
 うこんつの小菊一輪さしたれば部屋一杯に秋のほひす
 二人して今ゆさくくと荷ひ來し大鉢の菊盛りなりけり
 ぬぎすてし十一月の振袖の模様の菊も高くかほりぬ
 菊の花咲く秋毎の思ひ出は幼き時の飯事遊び
 心して培ひ上げし菊の花神にそなへてぬかづきにけり
 我が庭の菊の花折りて胸にさしいさをたてたる人の如歩かん
 文鳥の千代千代鳴くに聴き入れる瞳に明るしも菊の眞盛り
 赤とんほ飛びかふ畑の片隅に小菊の花のむらがりて咲く
 床の邊に活けた菊菊は日をへつゝ蕾開きて今盛りなり
 我が植えし小菊のつほみふくらめば香れ咲けよとねがひまされる
 朝つゆに菊の葉青く光りたり

三左 符 阪 文
 三左 西尾須磨子
 三左 米田女禮
 三左 山本十四夫
 三左 藤満正子
 三左 柳生みつ
 三左 佐藤美代子
 三右 江藤満壽子
 三右 山本みえ子
 三右 平井久子
 三右 中村貞子
 三左 兒玉ハナ
 三左 佐々木澄子
 三左 大村てい
 三左 渡邊美代子
 三左 阪尾峯子

菊が香やふる雨にふむ床土の黒しくめりて
 衣すれのして青き菊葉に眞玉こほれぬ

日の御旗

大海原白波たて、ゆく船の一さきに踊る日の本の旗
 紙ばたをうちふり遊ぶ幼子もけふのりを喜べるらし
 山の中の一軒家にも日の丸のはえて見ゆなり今日のよき日に
 さわやかにみのりの朝あけゆきてかゞやきまさる日の本の旗

三右 谷村つね子
 三右 青山須磨子
 三右 粕本花枝
 三右 大喜多糸惠

よろこび

日の本の大き喜び大御典に生れあひたる我が身の幸かな
 皇神と共にいませる大君の御饌さ、けます夜の雨かな
 しめやかに潔めの雨のふりそ、ぎ神降ります大嘗祭の夜(大嘗祭)
 奉祝のつとひの部屋をかざらんとくす玉を造る心うれしき(奉祝クラス會)
 秋深き軒につられし萬歳旗の日に輝きて色まさりけり
 萬歳と旗行列が叫ぶ時さそはれて叫ぶも心樂しき
 八千萬の萬歳の聲大君もきこめすらむこの祝聲
 古をさながら五節の舞にまで日本の國に有難きかな

三左 岩井濱子
 三右 上村康子
 三右 松田フミ
 三左 諫川千代子
 三左 小山ひさ子
 三左 柳生みつ

夜をこめて迎へまつれる國民の心うれしき今日の大行幸(鹵簿拜觀) 三右 川井美代子
うからやから炭のさ・やく火鉢をばかこみてみたり御鹵簿の繪を 三左 山本十四夫

大御典の秋

大御典あけま・し日を壽ほぎてひなも都も菊さかりなり 一左 千鳥 益子
大君のみいづと共に香も高く咲きにほふなり黄菊白菊 一右 芳野 美知
大御典ことほぐとてか大菊のうるはしく咲く今日の朝かな
すめらぎのみやびやかなる御鹵簿に繪巻物見る心持のする
枯枝にとまる鳥の鳴く聲も祝へと聞ゆ大御典の秋
久々に生土ふめば心よしこのあさあけの大菊畑
我手にてつちかひそだつ大菊の花よつほみよいとほしきかも
大君の御代の榮えを永久に祝ひまつりてにほふ白菊 三上 春枝



斯秋反省

母

二左 高棟好子

母……なんと、私達には、親しみの多い名なのでせう。
私達には慈しみ深い両親が、御座います。しかし、父にも
まして、母程、なつかしく、心強さを與へて呉れるものは、
他にはない様に、思はれます。
なつかしい。心強い。その心の起るのは、何でありませう
か。母の心から、湧き出る言葉、姿が、そんなに、させるの
ではないでせうか。

今若し、私達から、この母を、奪つたなら、私達は俄に、
淋しく、啼い世界に陥入つてしまふのです。すが／＼しい朝
の大氣を、吸ひながら、芝に腰をおろして、幼い者にやさし
く、いたはつて、ゐられる母を見た時、崇高な心に、うたれ
ます。慈愛に満ちた母は、必ず美しいものを、何處かに持つ

てゐられます。よく母さんが、裁縫を、してゐられる折、赤
ちやんを休ませてゐられる折、又、親身の者の、病氣のみと
り等を、してゐられる時、神聖な、神々しいものが、美しい
母さんの何所かに、表はれて、ゐます。

私は或日、「ラファエロの目」と云ふ御話を讀みました。

伊太利の畫聖、ラファエロが、あの美しい、神々しい、マ
ドンナの、後を、畫きました。しかしその、モデルは、一人
の女の人ではなかつたそうです。ラファエロの、口からは、
意外な言葉が出たのです。「私は、多勢の母親を見て歩いて
どの母親からも、美しいものを見つけ、蜂が蜜を集める
様に、それを集めて、畫き上げたのです。」と、答へたさう
です。「マドンナ」のもつ氣高さ、淨らかさは、私達の母さん
が、やはり此の世に、もつて居られるのです。或日の事母さ
んが、縁側で一心に、お裁縫に餘念なくして、ゐられるのを
見て、早速この事を、思ひ浮べて、「ラファエロ」の目で母さ
んを眺めました。

すると急に、私は、恥ぢねばならぬ氣持が、湧くのを禁め
る事が出来ませんでした。今まで、母さんは、よく情深く、
又あわれな人の話を聞いたりすると、貫ひ泣きをされます
ので、よく泣蟲だなんて、言つた事が、悔いられて、來まし
た。それから氣のついた折には、西に向つて、生駒様に、母

さんの達者であられる事を、祈る様になりました。
子はすやくと、ねむれども、

案じて、たく夜着の裾 霜夜に、寒き鐘の音を

母は、幾度歎へけむ。

すべての命弱けれど 愛の力は、火と燃えて 名

もなき空の小鳥にも 見よや、尊きこの姿。

一月程前に、私は、或雑誌でこれを、読みました。すぐに
母さんにも、読んで上げました。私達の幼き日は、しみじみ
と、母さんの口から、もれてまいりました。中でも、私は一
番強く母さんの心を、いためたそうです。

皆さん右の歌を讀んで、何かを、教へられはしないでせう
か。私達が大きくなるまでの、母の苦勞、愛の強さを、感じ
ないでせうか。私の母さんは、よく言ひます。

「私は、貴女方が幸福に、丈夫に大きくなつて、行くのを見
ると、どんなに、苦しんでもいとはない。只達者である様、
立派な人に、なる様そればかりが、心に案じられるのです」
と。私は御大典を記念とし、両親に對する敬愛の念を、益々
磨きあけて、「ラアフエロの目」でもつて、両親を眺め、感謝
したいと、思ひます。

蔭日なた

無名氏

私達は今蔭日なたと云ふ事について修身で相互學習して
ます。私は蔭日なたと云ふ事は多くの人は知らずして
ると思ひます。又これに陥ち入りやすい事です。今日の御大
典にこの事を學習してゐるのは、何かの因縁であると思ひま
す。

此の御大典を記念として蔭日なたを無くしようと思ひまし
た。先づ私の蔭日なたの反省は、學校では、

1、授業中に鼻をかみそのかみ屑をポケットに入れるのも
きたないからと思ひ一寸机の中へ入れて置きます。そして授
業が終るともう忘れてしまつてそのまゝです。本當にこんな
きたない事しようとは思つて居ませんが、つひ忘れてしまひ
ます。

2、又時間中に鉛筆をけづります。其の時前の人のかけで
コッ／＼けづり、鉛筆の粉をフツと吹いてしまひます。これは
小さい事ですすがやはり蔭日なたのあるしようです。で人が
見てゐる時には紙の上でけづります。だからかけ日なたです
かけ日なたのある事はうそをつくのと同じです。

だから人が見てゐてもゐなくても同じ事をせなければなり
ません。

又人の悪い事を批評して、自分の事を一寸も言はない人も
あります。

私はそんな事をしないで人がなされた事を、よい事であれ
ばそれを眞似し、悪い事なればそれを手本にして、自分の行
と比べて見て、自分にもあればそんな事を止める様にしなけ
ればならないと思ひます。

いつもかけひなた無しに誠の道を踏んだ人は西郷隆盛で

「天を相手にせよ」と云はれたそうです。

人に見てもらはないで天に見てもらふと云ふ事です。

又昭憲皇太后は

ひとりのみ、思ふ心のよしあしを

てらしわくらん天地の神

とお歌ひ遊ばした。

支那の朱子は

「獨りをつゝしむ」と言つた。

又楊震と云ふ人はかくれてわるい事をする時に誰も見て居
ないと思つてゐるがいつも神様は、見て居られる。又二人以
上の時は相談してゐる人達が知つてゐる、故に誰も見て居な
い者は一人もない。

御大典に際しての修養的企

三年生

- 一、川村先生の御話を聞いてから、親孝行をしよ。う
と思つた……………二十九人(六人)
- 二、これから毎日まじめにいつはらずつゞけて。日記
をつけようと思つた……………十六人(二人)
- 三、兄弟争をしないで仲よくしよう。思ひました
……………十人(二人)
- 四、學校で習つた事は其の日に整理して。おく事にし
よと思ひました……………九人
- 五、言葉を美しくする……………九人
- 六、一心に勉強しようと思つた……………八人(二人)
- 七、いつも、ゆつたりした氣持をもつて、おこつたり
しないやうにしたい……………八人

- 八、體を丈夫にしたい。……………八人
- 九、自分の部屋を美しくしよう。……………八人(一人)
- 一〇、一日一善のノートをつくらう。……………七人(一人)
- 一一、ノートを美しく最後まで使はう。……………七人
- 一二、目的を立て、それをなすとけてしまふ様にし
たい。……………七人
- 一三、能律の上る勉強の仕方をしよう。……………六人
- 一四、何か一つ記念物をつくりたい。……………六人
- 一五、試験の後でさわぐのをやめる様にしよう。六人
- 一六、御大典の御様子が新聞にのつて居たのを切り抜
き一つの本の様にとちようと思ふ。……………六人(二人)
- 一七、何事も善意に解釋する様にしよう。……………六人
- 一八、常に愉快に過さう。……………五人
- 一九、人の悪口をいはない様にする。……………五人
- 二〇、床に入つてから小説等を讀まないやうにする。
……………五人(一人)
- 二一、自分のものを始末する事。……………四人
- 二二、友達と仲よくしよう。……………四人
- 二三、毎日の事を反省しよう。……………四人
- 二四、目上の人の言ひつけをよくまもる事。……………四人
- 二五、クラスに箱をもうけクラスの爲にこんな事をしたいと

- か、こんな事をしてはいけなと思ふ事をその箱に入
れて、それを見てクラスの改善につとめたい。……………四人
- 二六、クラスの自治會をつつてクラスの向上につと
めたい。……………四人
- 二七、道に大きい石や不潔なものが落ちてゐたらのけ
る。……………四人(一人)
- 二八、心が安らかなる様に信心しやう。……………三人
- 二九、きまり正しく物事をなす。……………三人
- 三〇、寢床を自分で上げる。……………三人(二人)
- 三一、日曜日等には必ず御飯をたいたり、お母さんの
お手づだひをしよう。……………三人(二人)
- 三二、節約をしやう。……………二人(一人)
- 三三、進取の氣象をもつて進みたい。……………二人
- 三四、我が國の女性も現代のやうに浮華に流れず、剛
健な女性を發揮したい。……………二人
- 三五、公衆作法をよく守つて實行する事に注意して
る。……………二人
- 三六、日本人の遊情に流れやすい性質をなほしたい。
……………二人
- 三七、時間を正しく守らう。……………二人

- 三八、我情をおさへよう。……………二人
- 三九、朝早く起きよう。……………二人
- 四〇、勝手きま、な事をやめる様にしよう。……………二人
- 四一、履物を丁寧にぬぐ事。……………二人
- 四二、植物、動物、其の他の道具をかはいがつてやる。
……………二人
- 四三、天皇、皇后兩陛下、諸皇族方の御寫眞が新聞等
に出てゐたら切抜いて寫眞帳をこしらへよう。……………二人
- 四四、良心の云ふ通りになる事。……………二人
- 四五、毎晩寝る前に齒をみがかう。……………二人
- 四六、現代の國民は理屈ばかりいつてゐて、實際の道
徳といふ事があまり行はれてゐないから、その
方に注意して行きたいと思ふ。……………二人
- 四七、何事もよく考へた上で實行しよう。……………一人
- 四八、もつと同情心を深くしたい。……………一人
- 四九、もつと何事も平氣でしたい。……………一人
- 五〇、つゝしみ深くなりたい。……………一人
- 五一、毎日一つでも俳句や歌をつくらう。……………一人
- 五二、反抗心をおさへる。……………一人
- 五三、御大典に際して感じた有難いとか尊いとか言ふ

- 心をいつまでも持つてゐたい。……………一人
- 五四、協力同心して新しい昭和の御代を何か有益につ
かひたい。……………一人
- 五五、純なすなほな清らかな心をいつまでもく持つ
てゐる様にしたい。……………一人
- 五六、虚榮にならない事。……………一人
- 五七、表をつくつて其の日くにしたよい事悪い事を
記さう。……………一人(一人)
- 五八、御客様がお出でになつたら挨拶をしやう。
- 五九、みだりに外國の風をまねず古い習慣でも良いと
思つた事はする様にしよう。……………一人
- 六十、口ばかりでなく實行しよう。
- 六一、悪い思想にうごかされない様にしよう。
- 六二、發表をもつと多くしよう。
- 六三、學校が終つたらすぐに歸り笑顔をつくらう。
- 六四、廢物を利用して何か綺麗な小細工をつくらう。
- 六五、毎日一錢づつ貯金して貧しい人々を助けてあげよう。
- 六六、健全な心になりたい。
- 六七、祖母さんに心配をかけない様にしたい。
- 六八、もつと女らしくやさしならう。
- 六九、自分に與へられた仕事は喜んでしよう。

- 七〇、人の爲になる事は出来るだけしよう。
- 七一、日曜毎に家中の雑布がけをしよう。………(一人)
- 七二、何事も思ひついた時すぐしよう。
- 七三、朝早く起きて勉強する。
- 七四、體を丈夫にする爲に冷水まさらつをしよう。………(一人)
- 七五、朝早く起きて家中の手傳ひをする。
- 七六、祝日には自分で國旗を出す。
- 七七、こたつを使用しない。
- 七八、人名簿をこしらへる。
- 七九、言はれぬ先に仕事をする。
- 八〇、自分に關係のない所でも清潔にする。
- 八一、人に不愉快な感じをあたへぬ様にしよう。
- 八二、一生をこく／＼してすごしたい。
- 八三、よい事を一日に五つ以上したい。
- 八四、鉛筆は三種になるまできつと使ふ。
- 八五、餘けいなおしやべりをしない様にしよう。
- 八六、廊下に帽子がおちていたら掛けておき紙屑等が落ちてゐたらすて、常に美しくしておこう。………(一人)

()の中は現在實行して居ると書いた人です。

以上

○ 畏くも天皇、皇后兩陛下御一代の御盛儀に際しまして、國民として、私達も心からお祝ひ申しあげております。かゝるお目出度い御大典にあたり、何か永久に記念すべき事を行ひたいと思ひまして、二年級全體が紙屑拾ひをして、學校を美しくしようと申合せました。又一個人としても修養に關する事を行はうと誓ひました。その事柄は次のやうであります。

左 組

- 親孝行、蔭日向のないやうにする事。
- ノートを最後まで全部使つてしまふ事、親孝行、修養ノートを作る事。
- 親孝行。
- 自分の室の整頓。
- 親のいふ事を守り、家事の手傳ひをする事。

- 寛容な精神を持つ事、謙遜な態度をとる事。
- 毎日勉強する事。
- 早起早寝のくせをつける。
- 父母に口答せぬ事。
- 親孝行、早起して家の手傳ひする事、日々の復習、豫習兄弟仲よくする事。
- 毎朝身を清め神様に御燈明をあける事、
- 儉約する事。
- 我を去つて誰にも親切に。
- 自分が出来るだけの事を進んでやる事。
- 凡てを善意にとつてゆく事、毎朝雨戸を明けて、お庭の掃除する事、妹や弟をいたはる事。

朝おそいくせを直す事、朝のお仕事をやる事、

- 私の今の弱い身體を丈夫にする事。
- 蔭日向のない様に、我を去る事、毎日一錢づ、貯金する事、毎朝五時半に起きて復習と神様に禮拜、お母様を大事にする事。
- 目上の方に眞面目に禮する事、便所のお掃除と門口を綺麗にする事、蔭日向をなくする事、整頓、日記をつける事。
- 何事も自分で進んでやる事、
- 反省日記をつける事、自分の寢間を掃除する事。
- 親孝行、朝夕齒をみがく事。
- 朝から叱られないやうにする事、學校から歸つてお掃除する事、小さな洗濯物をする事、自分で朝の身仕度をする事、短氣を出さぬやうにする事。

親孝行。

日記をつけること。

親孝行。

親孝行。

自分に出来る事は他人の手を借りない。

親孝行。

反省帳として日記をつける。

貯金。

親孝行、着物を質素にする事、一日一銭の愛國貯金。

親孝行、一日二回歯をみがく事、家事に務める事、人を信ずる事。

反省に簡単な日記をつける事。

陰日向をなくする事。

親へ只答をするのを止める事。

姉妹喧嘩をしない事、親孝行。

日記をつける事、母に口答せぬ事。

學科の復習と豫習。

大空のやうな廣い心を持つ事。

親兄弟に口答せぬ事。

日誌、朝の掃除。

物事を自發的に一生懸命にする事。

自分で出来る事は自分でやる、自分の室を綺麗にする

親孝行、早寝早起の習慣をつける事。

右組

陰日向のないやうに、言はれたらすぐ「はい」と答へてする事。

陰日向のない様に、親孝行、御大典に関する新聞やマ
ークや繪葉書を集める事。

親の命を守つて親を喜ばす事、弟達に親切にしてやる
事、出来る限りお母さんの手傳ひ學校の當番を喜んで
やる事。

朝庭に出て深呼吸をする事。

父母に毎週二回宛手紙を出す事。

沈黙を守る事。

川村先生のお話を守る事、陰日向のないやうに。

毎日貯金。

毎朝勉強室の掃除をする事。

反省帳を作る、よい習慣をつける、小學校の先生に手
紙を時々出す事。

毎朝六時に起床、毎晩神様と佛様に燈明をあける、自
分の室の掃除。

日記、自分の室を綺麗にする事。

一日一度母の手傳ひをする。

佛様に心から拜む、「つぶやき」をやめる事、輕はづみ
な事を氣をつける。

毎朝自分の靴をきれいに磨く。

両親のいふ事をよくきく、朝寢具の始末をして室内の
掃除をする。

今までの悪い行を改める、自分の寢室の掃除。

日課をきめて守る、日誌をつける。
親孝行、早起して掃除する。

毎朝の居間の掃除、叱られないやうにする事、自分の下着や靴下等の洗物、靴磨き(父や妹)の分もする事、小使の節約貯金、食過ぎしないやうに、花瓶の花を度々取かへる事、夜寝る前口を清潔にする事、公德心を伸す事。

裁縫して後の始末をよくする事。

毎日一錢づ、貯金、机の上で鉛筆をけつ、て吹く事をやめる。

誠と愛、運動を盛にやる事。

朝起の習慣をつける事。

清潔にする事、節約して毎日一錢づ、貯金する、一日一度必ず人を喜ばせる事。

日記をつける。

朝起就寝の時間をきめて正しく守る、誰にも裏表のない様にする事。

亂雑にせず衣服等は必ずた、み寢床の下に敷く事、朝夕の御飯の仕度お掃除をして親を喜ばせる事。

反省日記をつける事、蔭日向のないやうにする事、早起して勉強し後の始末や着物の始末を自分でする事。

仕事をするのに不平を云はず明い氣持でする事。

親孝行、自分の室を自分で掃除して氣持よい所で勉強したい。

ニコく主義の實行(不平やおこり顔をせぬ事。)

出来ない事でも返事だけは「ハイ」とはつきりする事、常に明い心をもつて物事を明く考へる。

親孝行。

どんなに讀みたい本でもせねばならぬ事のすまぬ限りよまぬ事。

どんな腹立たしい事があつてもニコくする。

悪い習慣を直してゆく事。

日記をつける事、毎朝門を明けて庭をはく。

早起早寝、勉強する事。

自分の室を朝から掃除する、心を清く改める。

毎夜齒をみがく、一日一善の日記をつける。

蔭日向のないやうに、清潔を守る事。

日記。

親孝行をノートを作つてする。

川村先生のお言葉「一日二度づ、両親を喜ばせ」を守る始業の鐘がなつてから無駄話をしない、家で御飯の後始末を手傳ふ。

朝の掃除、冷水摩擦、反省ノートをねる前につける。

終り



記念精學

保健に就て

四右 神戸千鶴枝
島津文子

何日でしたか主事先生が「御大典記念にみんなは、いろいろ修養的企てをしてゐるだらうが、其の一つとして體の弱い者は此の機會に體を丈夫にしようとするのも、い、だらう」とお話しになつた事がありました。最近のお話でもありますし皆様もよく覚えていらつしやる事と存じます。

實際私等の學校は體の弱い方が多くて休學々々といふ言葉をよく耳にします。又學校を休む程でもないが、年中青い顔細い手をしてちよいと頭が痛いとかお腹の具合が悪いとか言ふ方も大分見受けれます。

もと此の學校にいらつしやつて轉任なさつた後、何年ぶりかで奈良へお出でになつた先生が「此所の生徒は一體に弱々しさうだ」とおつしやつた事があります。學校へ來てゐる以

上、勉強も大切ですが命あつての物種と云ふ通り、健康でこそ勉強の仕甲斐もあるのです。主事先生のおつしやつた御大典を記念に先生のお言葉を實行して、是非體を丈夫にしたいと云ふものだと考へます。

朝會其の場合に大勢が集まつて居る場所で、よく卒倒する方があります。これは外にも原因がありませうが、大抵は睡眠不足から來るのではないと思ひます。

毎日々々勉強はまだしも遊び事の爲に夜更しが、續きますと次第に頭が疲れ所謂睡眠不足となつて神経が著るしく害されます。このやうになつて來ますと、これがもとなつていろ／＼の故障が體におこつて來るのか常です。一番多いのは寢てもねてもねつかれない事です。これは外に刺激性の物を飲食した時、心配や不快の念が深い時等にも原因されます。

ですから神経衰弱を避けようとするには勿論今言つた様な事をさけてなるべく規則正しい生活をせねばなりません。

次に胃腸の事ですがお腹を壊さぬ様にするには、第一に食べすぎ飲み過ぎをやらぬ事です。腹八分目といふ言葉は、もう誰でも耳にタコによる程おき、になつたでせうが私は小さい時に「鶴はいつも腹八分目で食事を止めるから千年生きてゐるし鶴は六分目しか食べないから萬年も生きられるんだ」といふ話をきかされた事があります。まさか腹八分目主義

なら千年もといふ事はありませんが、昔の人の經驗から割り出された言葉ですから衛生上あてはまつてゐます。

實際動けなくなるまで食べ込んだりしますと、とかく胃擴張だの胃カタルだのと厄介な事になります。自分の食ひしんほうから夜中に泣き出して「お母さんどうして、こんなにお腹が痛いんでせう」なんて人ささがせをするのは、あまり見つともよい光景ではありません。

まあ誰だつておいしいものを澤山食べる事は楽しみですが、しかし食べ込んだ其の時はよくても後の苦しみを思へば、おいしい舌ざわりの後に苦いお薬の待つてゐる事を考へれば、差し引きどうなりませう。殊に平常から胃の弱い方は口と相談せやにお腹と相談して召し上げる事です。

胃や腸も身體と同じ様につかれるといふ事があります。大たい食物は食後二時間乃至五時間で全部腸の方へ送り込まれるものですから食事の後一時間位は、あまり勉強や運動をしない方がよろしい。又入浴もなるべくその間にしないやうにした方がよいのです。

これは勉強や入浴や運動をすると體の血が頭や皮膚の表面や筋肉等を集つてしまふので胃や腸の方へは廻りかねて食物を消化する事も充分出來なければ、食物を消化する役目の消化液も、出難くなつて自然食物は腐敗して胃や腸を害する事

になります。又反對に運動後すぐ、つめ込むのもいけないので、學校でも折角食後に一時間も休む様にしてあるので、すから其のつもりで、少しばかりのお辨當をろくにかみもせずに食べ終るやいなや、運動場に駆け出す様な事は避けた方がよいと思ひます。

此の充分かむと云ふ事も大切です。口の中で長くかむと、よく碎けるばかりでなく唾液が作用して食物を消化しますから、それだけ又胃や腸はつかれずにすみます。

少し腸道へそれますが、かむには矢張り歯が大切です。夜甘いものを食べて其のまゝ寝る様な事は大の禁物です。むし歯のある方は丁寧に歯を磨き、さうでない方も、充分注意していたゞきたいと思ひます。歯等といふものは痛くならない中は其の有り難味が中々分りませんし、痛くなりかけると又どん／＼むし歯のふえるものです。

又話をもとにもどりますが、胃腸を助ける爲には食べる物をおいしいと思つて口にします。

い、匂ひおいしい味綺麗な色等してゐると知らず／＼消化液が——早く云へば唾液が出て參ります。それにはお母さんのお手傳をしておいしい御馳走を作るのもい、でせうし、お腹をへらす爲に運動してもよいでせう。

二言目には運動と云うて來ましたが此の運動も考へが必要

です。運動に慣れない人や體に異常のある人が急に烈しい運動をする事は往々危害を招きますから、氣をつけねばなりません。又慣れた人でも勝負に氣を取られて無理な事を續けるのはよくありません。

つかれた時には必ず休息が必用です。何故ならば心身の過勞によつて次第に體が弱つて行くからです。又このやうな心身過勞の時には傳染病にかゝり易いのです。

傳染病といつて來ましたから今その事について少し話して見たいと思ひます。大抵の人は一度傳染病にかゝると二度と同じ病氣にかゝらないといひますが決してそんな安心したものではありません。實際あばたのあるおばあさんが瘡痘にかゝつた話もありますから。けれど二度目は大抵の人は軽いのです。其の理由は免疫といつて其の時に又新しく病氣に對する抗體や抗毒素が前よりも一層多く又すみやかに製造されるからさうです。

又傳染病菌は口から入るだけでなしに傷口から入る事もありますが常に清潔に保つておかねばなりません。

いつも塵埃の多い空氣を吸ひますと、其の外に氣管枝や肺の粘膜を害ひます。

其の他普通の人のあまり注意しないことですが、おしろいをつける事と背のまがる事に氣をつけねばなりません。

女の子が大きくなりますと皆おしろいをつけますね、つけない人は先づないでせう。一がいにわるいとは云へませんがよいおしろいでもなるべく少しつける様にした方がよからうと思ひます。まして鉛の入つたやうなのが、いけないことは云はなくてもわかつてゐます。大抵のおしろいの中に鉛の入つてゐるといふのは、鉛を入れるとおしろいがよくつく爲ださうです。

脊骨のまがりにはこれこそ何の關係もなさうに思はれますが、それが爲に内臓が壓迫されて骨盤が傾いて時としては足にまで高低が出来るといつたやうになりますから毎日姿勢をよくしてまがらないやうに注意せねばなりません。

これで大體の所常識として必要な事は言ひ盡せたゞらうと思ひます。自分の心掛一つで體を丈夫にする事にもなれば又悪くする事にもなりますから、皆様もどうぞ今言つて來た様な事を守つて健康に注意して下さい。

會員名簿

横山榮次 眞田幸憲 多賀谷健吉 石橋タカ 徳田イネ 中原イネ 富田芳郎 久米道民 村田徳次郎 西本参拾貳 山本川フサ 棚橋みさを 小倉豊文 矢舖大治郎 大槻嘉藏 菊山静

富田とみ子 澁谷直倉 梶尾幸倉 前田アサエ 福山ハナコ 小山田ハナコ 金部富美恵 竹部富美恵 服部富美恵 大塚治六 藤井宗太郎 土井俊子 御笹政重 上田鼎三

生徒

五年左組(四三名)

北喜樫岡大大乾石迎清木川尾大大市井荒
浦多尾田友西ヨ都富静貞好千喜美と村塚村上井
美艶道文シ子美子子子子子子子子子子子子子
砂子子子子俊陸子美子子子子子子子子子子子子

五年右組(四四名)

福藤青二谷杉山山武御堀福藤野田玉壽佐久
守田本塚口山崎崎藤明内島井畑北司藤保
き美倭富治なズ代玲ズユ華和延ハ千秀道
く都佐子子をエ子子エキ子子子子子子子子子
ゑ枝子佐子ををエ子子エキ子子子子子子子子子

萱大上稻石油勝片太江井稻今淺米吉安森明増
園塚田垣井谷浦岡田藤上田西越田喜村田澤井
惠静照久千ヤシ富千美美子子子子子子子子子
美幸江子枝鶴ス子貴代代節子子子子子子子子子

松藤折西玉瀬島小森村水掘廣服名田島佐倉木河
本井川田井川美富雅治井清エシ静セミ部和中田藤本本野
タ清カ代久子子子子ンズ江ツエ恒枝エ子子子子枝カ
カ子ズ子久子子子子子子子子子子子子子子子子子

四年左組(四六名)

梶河岡太今神川大大梅荒
田合本田西戸口谷田井せ
正フ綾ヌク鶴正千い
子エ子エエ枝子代駒房子

檜根西中長戸田仙榊福平橋西中永中辻多坂高木
作木本島澤水田中富房島千靜正八貴志ハ敏ク照
静操サ子子子子子子子子子子子子子子子子子子
子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子子

四年右組(四六名)

上今飯岩今淺上安藪矢南松和安柳八三本藤平
田井田井西野山川内追山田御井澤ア壽艶エ嘉
敏都ふ鈴富ふ代八正不サ代ノ子良貞サ美子イ子
子子み子子み子子子子子子子子子子子子子子子子

中富竹關新酒喜上大岡中中出瀧島眞菊木小大奥
島川田谷井多久上本室芳口村津田田村野東田
榎琴節初マ美トみ敦房道筵文正ト若靜靜
子子子ぬ重ス子シち子子子子子子子子子子子子子

北朴木道子
楠本ト子
式地敏子
杉原ネ子
谷村ツ子
田崎千惠子
土崎千惠子
中村貞子
平井久子
船後博子
喜多ミッ子
小中ミッ子
佐藤美代子
清水濱子
田中しづ子
辰巳悦子
柘植萩子
中島さわ子
西澤正子
船木綾子
増田キ子

松本村俊
山本み
松田フミ
山本ヌ
米田フサ
赤松加代子
岩井雅子
河田久枝子
喜多村綾子
木村敏子
金春よ子
井内豊子
岡田富子
河野智恵子
木下伸子
倉山英子
小嶋中子
櫻井波子
菅谷道政子

二年左組(四六名)

竹田チ子
田中子
田中美穂子
立野律子
福井妙子
藤田て子
堀川米子
水野幸子
柳生ミ子
吉村ハル子
脇田敏子
田中子
辰己マサ子
角井愛子
西尾満子
符坂正子
藤満正子
宮田つじ子
森崎ふみ子
山本十四子
米田女禮子

八卷美意
安岡貞榮子
米田初子
上本山紀子
宮本眞子
守田智子
山田千代子
吉田セ子
吉岡美子
徳野文子
淺野と子
井手喜代子
井上ふ子
鷗飼ふ子
石田よ子
石老ふ子
海崎み子
大崎み子
岡本敏子
笠原静子
菊田ハ子

二年右組(四六名)

三年左組(四五名)

中辻久子
八田悦子
福森ミ子
松岡一子
前本キヨ子
三好悦子
森好悦子
山田ハル子
八島春子
米澤静子
平井静子
松本君子
増田シズ子
南田マサ子
宮坂タツ子
八木ふみ子
安井貴美子
矢邊きよ子
横井ふじ子
青木ミキ

浅井ミ子
諫川千代子
市村絹子
岩井演子
岩崎チカ子
大塚美枝子
大橋ハナ子
兒玉ハナ子
小山ひさ子
佐々木澄子
杉村貞子
石井清子
井上淑子
岩井富美子
大喜多糸子
大村てい子
垣内初子
小倉初子
小西信子
阪尾ノ子
島田リ子

武野千代子
竹村チ子
田中美穂子
立野律子
福井妙子
藤田て子
堀川米子
水野幸子
柳生ミ子
吉村ハル子
脇田敏子
田中子
辰己マサ子
角井愛子
西尾満子
符坂正子
藤満正子
宮田つじ子
森崎ふみ子
山本十四子
米田女禮子

三年右組(四四名)

渡邊美代子
河野りつ(休學中)
青山須磨子
石川美子
乾田せ子
飯田鶴子
江藤満子
奥林八千子
大西コヒ子
川井美子
エリサベス イングロット
伊藤藤枝子
井上嘉子
上村康子
岡本さ子
扇田菊子
小野タカ子
粕本浪子
菊田子

昭和四年二月三十日印刷
昭和四年三月二十日發行

(非賣品)

奈良女子高等師範學校附屬高等女學校校友會
編輯兼發行者 右代表者 眞田幸憲

發行所 奈良縣奈良市北魚屋町
附屬高等女學校校友會

印刷者 大阪府南區內安堂寺町一丁目二八番地
永田與三郎

受托取扱者

東京市神田區錦町三丁目九番地
大阪府南區內安堂寺町一丁目廿八
奈良市南半田西町十三番地

東洋圖書株式合資會社

終

